

19世紀半ばのシプソンパンナーとラタナコーシン朝 — ムアンポンのマハーチャイの証言から —

Sipsongpanna and the Ratanakosin Dynasty in the Middle of the 19th Century:
The Statement of Mahachay of Muang Phong

加 藤 久美子*

KATO Kumiko

Sipsongpanna was a Tai pre-modern state which had paid tribute to both Chinese and Burmese Empires since the latter half of the 16th century. In the middle of the 19th century, contact with the Rattanakosin (Bangkok) Dynasty also appeared. According to historical documents, Mahachay, the lord of Muang Phong, which was a powerful principality in Sipsongpanna, and the viceroy, who was a younger brother of the king of Sipsongpanna, as well as mother of the king and the viceroy went to Bangkok and stayed there for several years.

Thai researchers argue that this historical event implies that Sipsongpanna relied on the Rattanakosin Dynasty and sought the help in internal warfare against the enemy who tried to usurp the throne. However, to prove this, sufficient evidence has not yet to be raised.

In this paper, I examine a record of Mahachay's statement (Kham Hay Kaan), which was made to Bangkok in 1852. It was founded that Sipsongpanna's deepening relations with Bangkok or Nan, a northern tributary of Bangkok, could not be interpreted to mean that Sipsongpanna asked for help from the Rattanakosin Dynasty of her own accord. Instead, it is better to be interpreted that Sipsongpanna was forced to create relations with the Rattanakosin Dynasty by way of aggressive leading of Bangkok or tributaries of Bangkok.

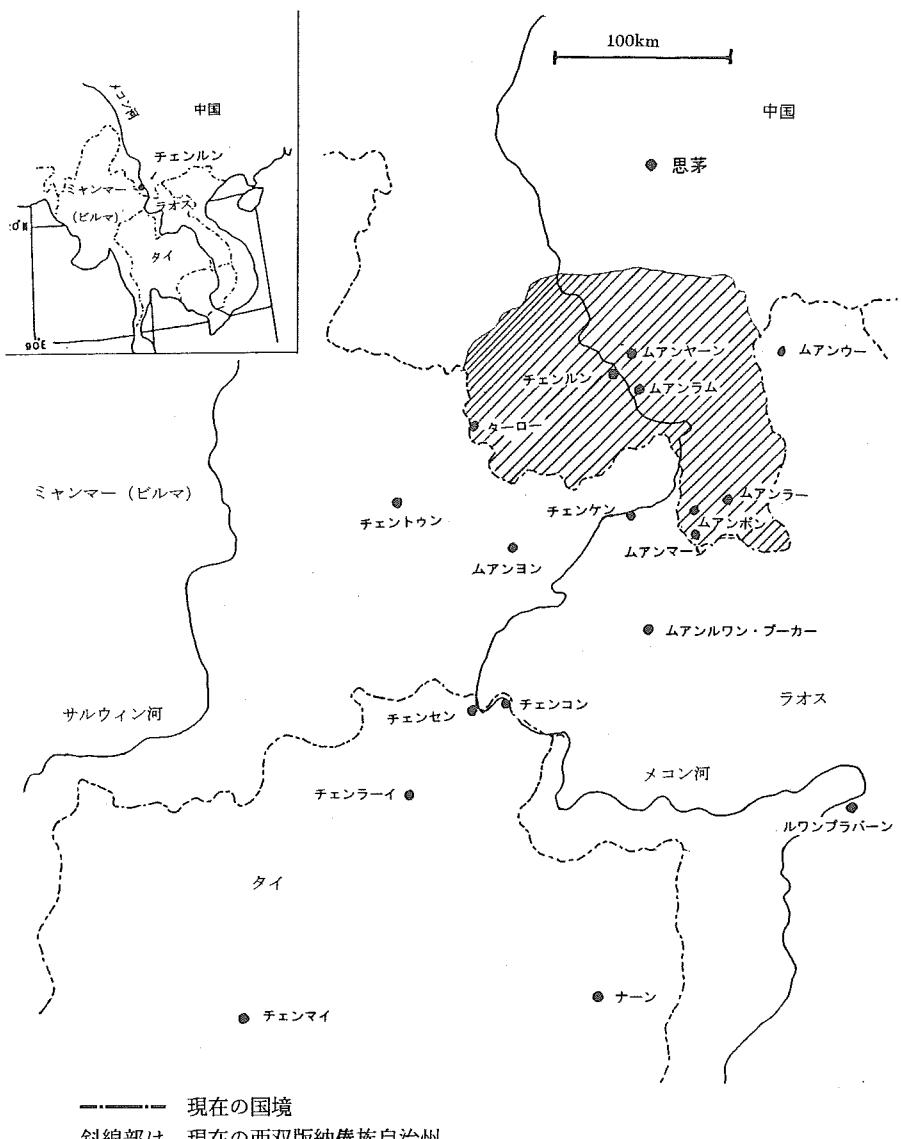
1. はじめに

シプソンパンナーは、現在の中華人民共和国雲南省南部に存在したタイ¹⁾族の政権である²⁾。ムアン³⁾と呼ばれる小国が二十数個集まって、チエンルン Chiang Rung⁴⁾というムアンの国主⁵⁾が王⁶⁾としてシプソンパンナー全土を治めるという形をとっていた、ムン連合国であった（地図参照）。シプソンパンナーには、元代には徹里軍民総管府、明代には車里軍民宣慰使司、清代には車里宣慰司

といった中国王朝の辺境統治のための機関が置かれ、代々の王は明代以降は、その機関の長である宣慰使の職を与えられていた。また、16世紀半ば以降は、シプソンパンナーの王は、ビルマ（ミャンマー）のタウンジー朝、コンバウン朝からもシプソンパンナーの支配者としての称号を与えられ認証されていた。すなわち、シプソンパンナーは中国王朝とビルマ王朝、双方に臣下の礼をとつて従属する形で存在していたのである。このような「両属」は、東南アジアの前近代的国家にはしば

*名古屋大学文学部・文学研究科

19世紀半ばのシプソンパンナーとラタナコーシン朝



しば見られることである。

ところが、19世紀半ば、シプソンパンナーでスチャーウンナ Suchaaawanna⁷⁾が王位に着いており、ラタナコーシン朝では3世王期終わりから4世王期初めにあたる時期には、シプソンパンナーとラタナコーシン朝勢力との接触も見られる。シプソンパンナーでは、この時代、スチャーウンナの王位を守ろうとする勢力と、それに敵対してノーカム Nōo Kham という別の王族を王位につけよ

うとする勢力がしばしば争っていた。スチャーウンナの王権は弱く、それを実質的に支えていたのは、シプソンパンナー内のムアンポン Muang Phong⁸⁾（地図参照）の国主、マハーチャイ Mahaachay であった。一方、ノーカムを擁立しようとする側は、ビルマ勢力やシプソンパンナーの南西に位置するチェントゥン Chiang Tung（ケントゥン、地図参照）⁹⁾ という国などの援軍を得つつ戦っていた。そのような時代に、マハーチャ

イ、および、スチャーワンナの同母弟であり副王（ウッパラーチャー Upparaachaa）であったアラムマーウタ Arammaautha とその母が、ラタナコーシン朝の王都であるバンコクに至って、そこに何年かにわたって留まるという事件が起こっている。更に副王とマハーチャイは、その後、バンコクとその北部朝貢国 pratheet saraat の連合軍がチェントゥンを攻撃するのに従軍している。

この事件について、ダムロン親王は、もとはチェンルンの支配者たちが激しく相争い、中国が片方をビルマがもう一方を援助し、争乱が長年に渡って続いた、そしてその後にビルマがやってきて苦しめたので、チェンルンの支配者たちは移住してきてラタナコーシン朝に住まわせてもらうよう頼んだのだと解説している [Damrongraachaa-nuphaap 1918 (『史料集成』第九部序文)¹⁰]。

ヤンヨンとラタナポンは、シプソンパンナー内の権力争いが、ラーンナー Laannaa¹¹ やバンコクといった、外部からの力を引き込んだとしている [Yangyong, Rattanaaphon 2001: 133]。具体的には、北部のバンコク側朝貢国の一いつであつたナーン Naan (地図参照) が、友好関係にあつたムアンポンに援軍を送り、更にマハーチャイをバンコクに送ったと説明している [Yangyong, Rattanaaphon 2001: 86, 133]。また、シプソンパンナーの支配者 caw naay たちの権力争いの中で、その一方がタイからの援助を求めたことがチェントゥン攻撃の原因であると言う [Yangyong, Rattanaaphon 2001: 151]。一方、ナッチャーも、シプソンパンナーで内戦が起つたとき、マハーチャイと副王はバンコクに逃げてタイに頼らなくてはいけなかつたとしている [Natcha Laohasirinadh 1998: 88]。いずれも、シプソンパンナー側からタイに頼り、援助を求めるとしているのである。

ダムロン親王を初めとしてタイ国側の研究者がこのように見ているのに対し、中国側の研究者は、

この事件についてチェンルンの王統年代記¹² の訳を引用したり年代記の内容として紹介したりはしているが、特に考察を加えてはいない¹³。ただ、年代記の訳あるいは内容として記されているを見ると、チェンルン側の王統年代記には、マハーチャイと副王は望まないのに捕らえられたり騙されたりしてバンコクに行き拘束された、としているものがあることがわかる。例えば、中国語訳された年代記、『泐史』¹⁴ の中では、マハーチャイは捕らえられてバンコクに連れていかれ、副王は騙されて母やマハーチャイを迎えてバンコクに行って捕らえられたのだと書かれている。また、チェンルンの王統年代記を元に中国で編纂された『車里宣慰世系簡史』[中国語版—中国人民政治協商会议西双版納傣族自治州委員会文史資料工作委員会編1987、タイ語版—西双版納政協文史組編1990]¹⁵ でも、副王は騙されてバンコクに行って捕らえられたとしている¹⁶。

マハーチャイや副王がバンコク側と関係を結びバンコクに至つたのは、彼らが望んでのことだったのか、それともバンコクやバンコクに朝貢している北部諸国の強制・策略によるものだったのか。あるいは、他の見方をするべきなのであろうか。

本稿は、先行研究で注目されてこなかった、1852年のマハーチャイのバンコク側に対する証言の内容に注目することによって、上記の問題について考察したい。そして、そこから、この時代のシプソンパンナーという国家が中国、ビルマ、更にはバンコクといった外部の大権力とどのような関係にあったかについても考えてみたい。

2 先行研究の中での位置づけ

まず、先行研究のこの事件に対する位置づけが何によっているか、その見方がどれほどの蓋然性を持ちうるかということを検討する。そして、それに対して本稿ではどのように議論をしていくかということも示しておきたい。

(1) ヤンヨンとラタナポンの見方

1でも言及したが、ヤンヨンとラタナポンは、シプソンパンナーの王位に着いたスチャーワンナとそれを不服とするノーカムとの間の権力争いが外部からの力を引き込み、それはビルマや中国ばかりでなく、ラーンナーやバンコクにまで拡大していったと見ていく。また、ナーンがムアンラー Muang Laa (地図参照)、ムアンポンのようなシプソンパンナーの国境 chayden にあった国と関係があるので、戦禍がムアンポンに至った時、ナーンが軍を送ってきて「親友」であるムアンポンを助けて一緒に戦い、また、ナーンと同盟した側のシプソンパンナーの支配者層の人たちをバンコクへ送るという事態を生じさせた、と説明している [Yangyong, Rattanaaphon 2001: 86]。

このような説明の根拠とされている史料は、タイ国文字。タイ国語へ翻字・翻訳されたチェンルンの王統年代記 [Renu 1989] であり、その原本は、前述の『車里宣慰世系簡史』タイ語版 [西双版納政協文史組編 1990] である。これは、シプソンパンナーが中華人民共和国の一部になって以降の編纂史料であり（注15参照）、ここに書かれていることを、それだけでそのまま事実であるとすることは到底できない。

また、ヤンヨンとラタナポンは、チェントゥン攻撃の原因是、シプソンパンナーの支配者 Caw Naay たちの権力争いの中で、その一方がタイ¹⁷⁾からの援助を求めたことであるとしている [Yangyong, Rattanaaphon 2001: 151]。その主張の根拠として使われているのは、『ラタナコーシン朝四世王期年代記 Phraraacha Phongsawadaan Krung Rattanakosin Ratcakaan thii 4』である。

『ラタナコーシン朝四世王期年代記』は、チャオプラヤー・ティッパー・コーラウォン Cawphrajaa Thipphaakorrawong が五世王の命令で編纂し、その後、五世王を含む何人かが目を

通し加筆訂正を加えて完成したものである¹⁸⁾。チャオプラヤー・ティッパー・コーラウォンは、この事件が起こった時点において政治の中核近くにいた人であり、そのような人物がさまざまな史料を参照して書いているものなので、いつどのような事件が起こったかということについてはかなり信頼がおけるといってよいだろう。また、バンコクで政治に関わる大臣・官僚側が一連の出来事をどのようにとらえていたかを読み取ることも可能かもしれない。だが、編纂・加筆訂正される際には、五世王時代の価値観に基づいて、話の筋を通してあるべき姿として構成された可能性が多いにある¹⁹⁾。よって、この史料によってチェントゥン攻撃の原因が何だったかを議論することは難しい。また、この史料をもって、シプソンパンナーの支配者たちがバンコク側からの援助を求めたという事実があった証拠とすることもできないのである。

本稿では、4以下の史料の検討において、シプソンパンナーの支配者たちがタイからの援助を求めたのかどうかということに加えて、シプソンパンナー内部における王位争いがバンコク側の力を引き込んだと言えるのかどうか、ナーンとムアンポンはこの事件が起こる前から友好関係にあったのかどうか、ナーンはムアンポンに援軍を送るという形で関わっているのかどうか²⁰⁾という諸問題に対する解答を得たい。

(2) ナッチャーの見方

シプソンパンナーで混乱と内戦が起こると、チェンルンの国主（王）は逃げてルワンプラバーン Luang Phrabaang (地図参照) に頼り、マハーチャイと副王は、逃げてきてタイに頼らなくてはならなかつたと、ナッチャーは説明している [Natcha 1998: 88]。その要因として、ナッチャーが言及しているのは、ビルマも中国もそれぞれの内部問題を抱えていたので、以前ほどシプソンパンナーに干渉することができなかつたということ

のみである [Natcha 1998: 87]。では、マハーチャイや王たちが、王位を篡奪しようとする反対勢力との戦いの中で、ビルマや中国に頼る代わりに、バンコクやバンコク側朝貢国に頼ったということになるのだろうか。ナッチャーのこの見方が正しいかどうかは、4以下で史料を検討していく中で、そもそもシプソンパンナーがバンコク側に頼ったと言えるのかどうか²⁰を検証する作業を通じて確認していきたい。

また、ナッチャーは、小暦1220年（西暦1858年）のチャオプラヤー・ニコンボディンの手紙の草稿²¹を史料として、シプソンパンナー側が金・銀の花や貢納品を持ってきて以後の三年一貢を約束したこと、それに対して四世王が「タイのような大国は国境 *khet den* に近くにある小国にとって頼り滞在すべきところであることを示すように振舞わなくてはならない」と考えた、というところなどを提示しつつ [Natcha 1998: 88-89]、シプソンパンナーの王がタイの王の庇護を求めてきたことが、タイがシプソンパンナーの内部混乱の問題解決に関わるよう導いた部分があると述べている [Natcha 1998: 89]。

しかし、この朝貢は、バンコクにいるチェンルンの副王とその母およびシプソンパンナーからバンコク側に行っている家族たちを返して欲しいという請願とともにしなされたものであり、シプソンパンナーがバンコクの王の庇護を求めるためにしたものではないことは、そこに引用されている史料自体 [Natcha 1998: 88] からも読み取れることである。よって、この史料でもって、シプソンパンナーがバンコクの庇護を求めたとは言えない²²。

また、この朝貢は1856年のことであり²³、副王とその母、そしてマハーチャイがバンコクに至った1848年の、実に八年後のことである。この史料からは、1848年の段階でバンコク側の庇護を求めたりバンコクに朝貢したりしようとする意思がシ

プソンパンナー側にあったかどうかはまったくわからない。この点は、4以下で史料を検討することによって考えたい。

3 1852年のマハーチャイの証言について

本稿において検討する中心的史料は、タイ国で出版された『史料集成』 Prachum Phongsaawadaan という叢書²⁴の第九部の中に収められている、「ムアン・チェンルンのポンサー・ワダーン」の前半部分である。ポンサー・ワダーンは普通は年代記と訳されるが、この史料の前半部分は、カムハイカーン *kham hay kaan*、すなわち陳述あるいは証言という文書の形式 [川口2005: 27-28] にほぼ沿っている²⁵。そのことから、当時実際に書かれた調書の内容が、ほぼそのままそこに収録されている可能性が高いと言える。その中身は、1852年になされたマハーチャイの証言である²⁶。

この史料には、マハーチャイの捕らえた「事実」が中心として書かれている。ただし、これは、マハーチャイがバンコク側に対しした証言であるので、マハーチャイ自身もバンコク側に配慮した言い方をしたであろう。また、調書として書いて記録に残す方も、もしバンコク側の立場を損なうような言葉があればそれを改変した可能性はある。また、『史料集成』に載せる時に、呼称の変更に加えて、他にも変更が加えられている可能性がある²⁷。

だが、マハーチャイに証言をさせた目的が、メントゥン攻撃に備えての情報収集と考えられる [石井 1999b: 294, 川口 2005: 27] ので、少なくとも調書をつくった段階では、事実関係については証言された情報をそれほど改変せずに載せていると見てよい。更に、出来事が起こった年月日²⁸なども書かれており、起こった事の過程をかなり詳細に追うことができる。また、シプソンパンナー側の立場から、この事件について述べられ

ている史料は、現段階では他には入手できない。よって、筆者は、この史料を、出来事の過程を見ることを中心に考察していきたい。

4 19世紀初めにおけるナーンとムアンポンの関係

マハーチャイの証言を検討するのに先立って、まず『ナーン年代記』Phongsawadaan Muang Naan [Phongsawadaan Muang Naan 1964, Nidhi Aeusrivongse ed. 1996]³⁰⁾ 中の記述を中心に、19世紀初めにおけるナーンとムアンポンの関係を見ておきたい。

ナーンは、現在の北部タイ地域における他の勢力と同様、18世紀終わりにその地域におけるビルマの支配力が弱くなった時に再興された。外からの難民を受け入れたりメコン河流域へ軍隊を送ってその地の人々を強制的に移民させたりして労働力として取り入れながら、1830年代までには北部地域の中心地の一つとなっていたという [Walker 1999: 29-30; Wyatt 1994: 87-95]。

『ナーン年代記』には、1804年のこととして、ナーンがチェンルン、シプソンパンナーを攻めよう軍を進めたところ、抵抗せずにバンコク勢力の下に入ることを願ったと書かれている。そして、ナーンの国主は、チェンルンのチャオムアンのおじであるチャオ・ナーマウォン Caw Naamawong とシプソンパンナーの支配者層の人たちを、チェンケン Chiang Kheng の国主³¹⁾の先導で、プーカーの国主³²⁾の子供もいっしょに、貢物を伴って、バンコクに行かせた。下賜品を持ってきたチェンルンの支配者層の人々を、ナーンの国主は自分のおじであるナーンの副国主³³⁾にチェンルンまで送らせている [Phongsawadaan Muang Naan (Prachum Phongsawadaan lem 10) 1964: 38-39; Nidhi Aeusrivongse ed. 1996: 41]。

また、『ナーン年代記』には、ナーンによるム

アンポンへの攻撃とムアンポンの人々のナーンへの強制移住の記述もある。具体的には、小曆1173年（1811年）6月黒分12日に、ナーンの国主であったチャオルワン・サムンテーワラート Cawluang Samun Theewaraat が、挙兵してムアンポンおよびムアンポンに隣接するムアンラー Muang Laa を攻め、その翌年の小曆1174年3月にムアンラーとムアンポン、そしてチェンケンとムアンルワン・プーカーの人々六千人を、ナーンに移住させたという内容である [Phongsawadaan Muang Naan (Prachum Phongsawadaan lem 10) 1964: 48, Nidhi Aeusrivongse ed. 1996: 45-46]。

チェンケンは、現在のラオスのムアンシン県西部のメコン河東岸バーン・シエンケンに中心のあった国であり³⁴⁾、それはナーンからは北に約300キロメートル、ムアンポンの南西約50キロメートルのところとなる（地図参照）。プーカーとは、ムアンルワン・プーカー Muang Luang Phuukhaa を指すと考えられる。ムアンルワン・プーカーは、現在のラオスのルワンナムター県西部のウィエン・プーカーに中心があった国であり³⁵⁾、ナーンのほぼ北200kmあまり、ムアンポンのほぼ南に100km弱のところに位置する（地図参照）。ムアンルワン・プーカーは、ナーンからムアンポンに至る道筋の途中にあるムアンである。

1804年の段階では、チェンケンの国主がチェンルンの支配者層の人々をバンコクに連れて行く役目を負っており、ムアンルワン・プーカーの国主の子供も同行していること、1812年にチェンケンとムアンルワン・プーカーの人々を強制移住させた話にそれらの地を攻撃したという記述がないこと、そして、小曆1178年（1816年）8月白分8日には、ナーンの国主が、チェンコン Chiang Khong³⁶⁾ とチェンケンとムアンルワン・プーカー³⁷⁾ の国主に白象を献上しにバンコクまで行かせている [Phongsawadaan Muang Naan

(Prachum Phongsaawadaan lem 10) : 51] ことから考えると、チェンケンとムアンルワン。プーカーは、少なくともこのころは、ムアンポンよりも直接的にナーンの影響力のもとにあり、また、ナーンを介してバンコク勢力の配下にあるという形をとっていたことになる。また、ナーンは、チェンコーンムアンルワン・プーカーというルートを押させていたことも確認できる。それと比較すれば、ムアンポンやムンラーが、ナーンやバンコク勢力の直接の影響下にある状態は長くは続かなかつたと考えてよいだろう。

では、本稿で考察の主たる対象とする1840年代においては、ナーンとムアンポンとの関係はどうあつただろうか。『ナーン年代記』中には、1840年代のシプソンパンナーやムアンポンとの関わりを示す内容は書かれていません。ただ、ヤンヨンとラタナポンのように、1840年代のナーンとムアンポンが友好関係にあった（1参照）と単純に言ってしまうことはできないだろう。

5 1843年のナーンからの要求

さて、マハーチャイの証言（以下「証言」とする）に見られる、最初のナーンとの関わりは1843年のことである。

卯年、末尾が5の年（1843年）³⁸⁾ 5月黒分10日に、ムアン³⁹⁾・ナーンのプラ・マノーラーチャー Phra Manooraachaa が兵を挙げて、ムアンルワン・プーカーにのぼって⁴⁰⁾いって駐留した。ナ・トゥイ Naay Tuy を任命してムアンポンに入っていかせて、友好的⁴¹⁾に話させ、逃げてムアン・シプソンパンナーに来ていた、ムアン・チェンケンのプレイヤー・モンコン Phrayaa Monkhan とターオ・クリッサナー Thaaw Krissanaa の家族を返すように要求した。マハーチャイは馬一頭と白いロバ一頭と絨毯4枚と鹿皮製の敷物4枚を用意することができて、やってきて⁴²⁾敬意を表した。だがロバについては、プレイヤー・ラー Phrayaa Laa を持ってこさせ（バンコクの王に）献上した。でもターオ・クリッ

サナーとプレイヤー・モンコンの家族については、別のグループの軍隊の人なので、送らせることがまだできなかった。 [Phongsaawadaan Muang Chiangrung 1964: 11]

「証言」中には書かれていないが、チェンケンの支配者層の家族がシプソンパンナーのムアンポンに逃げ込んでいたのを、マハーチャイあるいはシプソンパンナー側が保護していたものと見てよいだろう。ナーンは、ムアンルワン・プーカーに軍を進めたあと、人を派遣して、マハーチャイにチェンケンの支配者層の家族の引き渡しを要求した。人質とするためと考えられる。

それに対してマハーチャイは、チェンケンの支配者層の家族を引き渡すことを断っている。その理由は、チェンケンの支配者層の家族はマハーチャイの管轄下にないからというものであった⁴³⁾。だが、断る際には贈り物を用意した。そして、どこへとは書かれていませんが、おそらくはナーン軍の駐留していたムアンルワン・プーカーへ持っていたものと考えられる。また、贈り物のうち、白いロバ⁴⁴⁾については、バンコクの王に献上した。

このように、引き渡しを断る際、贈り物を直接持参することによって、マハーチャイはナーン側に敬意を表しなければならなかった。また、白いロバをバンコクの王に献上することによって、ナーンの背後にあるバンコクへも配慮した。このように、1843年のマハーチャイとナーンとの接触は、ナーンの方から軍事上の理由で接触をはかったものであり、マハーチャイは贈り物を用意して直接持っていくなど下手に出ながらも、要求を断っている。この時点で、ムアンポンあるいはシプソンパンナーは、ナーンあるいはバンコクの軍事力を警戒しながらも、軍事的に協力する関係にはなかつたことがわかる。

6 1844年のナーンからの要求

次に、マハーチャイとナーンとの接触があるのは、ほぼ一年後である。

辰年、末尾が6の年（1844年）6月、ムアン・ナーンのプレイヤー・シーソンムアン Phraya Siisongmuang、プラ・ムアンノーイ Phra Muang Noy、プラ・インタラーチャー Phra Intharaachaa が、兵を挙げムアンルワン・プーカーにのぼっていって駐留した。マハーチャイはおりてきて話をした。プレイヤー・シーソンムアンは、ムアン・シプソンパンナーに落ち延びている、ムアン・チェンケンとムアン・チェンラーイ Muang Chiang Raay の家族を引き渡すよう要求した。そして、金花・銀花・貢物を用意してムアン・ナーンに来たら、連れておりてきて（バンコクの王に）拝謁すると言った。[Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 12]

ナーンの軍隊が、再びムアンルワン・プーカーに来て、今度もマハーチャイはそこまで自身で出向いている。そこで話した内容はナーンからの要求であるので、「証言」中には書かれていないが、マハーチャイが自分から望んでナーンと接触を求めたとは考えにくい。使者が来るなどして、マハーチャイは出向かざるをえなかったのであろう。

今回のナーン側の要求は二つあった。ひとつはチェンケンとチェンラーイの家族の引き渡しであり、もう一つはシプソンパンナーによるバンコクへの朝貢である。

それに対して、マハーチャイは以下のように答えている。

マハーチャイは、こう言った。「ムアン・チェンケンとムアン・チェンラーイの家族は、ビルマが来て邪魔をすれば、連れ立って逃げてしまうだろう。マハーチャイは説得させておいた。チェンケンの国主も家族を委ねた。それを、プレイヤー・シーソンムアンが来て連れていくこうとしているのである。引き

渡すことはまだできない。そして、今回仕立てさせて（もって）おりていこうとしている金花・銀花は、ムアン・ナーンとムアン・シプソンパンナーはまだ誓約しあうことができない。ルー人のプレイヤー・シンカ Phrayaa Singkha の方も、おりていってムアン・ナーンに留まっているのが10年に至っている。シプソンパンナーの支配者層の者たち thaaw phrayaa も疑いを持つようになった。中国も、まだ事実が分からぬでいる。まず、マハーチャイと支配者層の者たちは、プレイヤー・シンカと人々 naay phray を返してくれるよう要求し、ムアン・ナーンの約束をまず要求する。」[Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 12]

「チェンケンの家族」とは、「チェンケンの国主も家族を委ねた」と書かれていることから考えると、チェンケンの国主など支配者層の家族であると考えられる。チェンケンの家族の引き渡しは一年前と同様の要求であり、今度はそれに、チェンラーイの家族も加わっている。「チェンラーイの家族」も「チェンケンの家族」と並んで書かれているところから考えると、チェンラーイの支配者層の家族を指す可能性が高い。この一年の間に、その支配者層の家族がシプソンパンナーに逃げ込んだのであろうか。

マハーチャイは、チェンケンの家族の引き渡しを今度も拒否している。明記はされていないが、チェンラーイの家族についても同様であろう。文中の「マハーチャイは説得させておいた」というのは、チェンケンとチェンラーイの家族に、他の地に逃げていかないように誰かに説得させたということだろう。チェンケンとチェンラーイの家族が他の地に逃げてしまえば、ナーンは人質とするべき人たちを見失ってしまう可能性がある。この部分は、チェンケンとチェンラーイの家族が他の地に逃げてしまうのを防ぐ努力をしているということで、マハーチャイが協力的姿勢をとっていることをナーン側に強調しているものと考えられる。

一年前の要求に対しては、「チェンケンの家族がマハーチャイの管轄下にない」というのを引き渡せない理由とし、マハーチャイ自身は引き渡しあたくないのか引き渡してもよいのかは書かれていたなかった。しかし、今回は、ナーン側との交渉の中で、マハーチャイあるいはシプソンパンナー側はチェンケンの家族は引き渡したくないのだということがはっきり示されている。家族を委ねられたのだからナーンには引き渡せないと、マハーチャイはしているのである。

バンコクへの朝貢については、シプソンパンナーはナーンを信用できないので、まだできないとして断っている。ナーンを信用できない理由は、一人ずなわちシプソンパンナーの人であるプラヤー・シンカとその他のシプソンパンナーの人々が、10年前からナーンに留められている⁴⁵⁾ことである。ここで、マハーチャイは、中国のことにも言及している。これは、シプソンパンナーには中国という、ある意味では強力な後ろ盾があること、またバンコクへの朝貢は中国への配慮なしにシプソンパンナーの都合だけで決断できないことを、ナーン側に伝えたものと見られる。

マハーチャイはまずプラヤー・シンカを返してほしいとの交換条件を提示したが、ナーン側はこの問題の進展を急がせる。

プラヤー・シーソンムアンは、そこでこう答えた。「プラヤー・シンカを迎えに行かせて連れてくるのでは遅くなるだろう」。どのようにしたらいいか、マハーチャイに考えさせた。マハーチャイは、そこで、プラヤー・シーソンムアンに水牛をさがさせて、双方一頭ずつ殺し、半分ずつ交換し、守護神を祀る祠を建てて、ムアン・ナーンとムアン・シプソンパンナーの守護神を招いて一堂に集まらせた。もし、どちらかが曲がったことを考えたら、破滅させるようになると願い、誓っておいた。そして、マハーチャイとムアン・ナーンの貴族 khun naan一人は、ムアン・チェンルンにのぼっていった。プラヤー・シーソンムアンは、そこで、プラ・インタラーチャーと

人々 naay phray 50人をムアン・チェンルンのマハーワンに会いにムアンヤーンに行かせた。
[Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 12-13]

結局マハーチャイはナーン側に押し切られ、ナーンとの間で誓約の儀礼をしたあと、王とナーン側とを引き合わせる手はずを整えることになった。マハーチャイはナーン側の一人と一緒にまずチェンルンに行った。この証言中に書かれてはいないが、ナーンの使節が来ることをチェンルンにいた王に伝えるためであろう。ナーン側は、王に会わせるために、プラ・インタラーチャーを代表とする50人の使節団を、ムアンヤーン（地図参照）⁴⁶⁾に送った。「ムアン・チェンルンのマハーワンに会いにいかせた」と書いてあるが、マハーワンというのはスチャーワンナの間違いであろう⁴⁷⁾。

(そこには) ムアン・アンワのビルマ人の人々 naay phray 25人、ユワン（ベトナム人）80人も来ていた。でも、ユワンの支配者層の人 naay は、何と言う名前か、どのムアンから来たのかはわからなかった。ムアン・アンワにおりていくのだということだった。でもビルマ人25人は、チャオ・アラムマーウタ Caw Arammaautha を迎えにおりていくように催促しにのぼってきた人びとであった。チェンルンの国主は、そこで、プラ・インタラーチャーにこう言った。「チャオ・アラムマーウタ、母、妹はムアン・アンワに留まっている。今ビルマ人が、ムアンヤーンに来ている。ものを用意させて行かせると、ビルマ人にわかってしまうのではないかと恐れている。まず、チャオ・アラムマーウタ、母、妹を迎えて行ってこなければならない。」
[Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 13]

ムアンヤーンには、ビルマの使節団とビルマに行くベトナム人たちも来ていた、と書かれている。ナーンの使節団に彼らの存在を見せるることは、シプソンパンナーはビルマとの関係も密接であった

ことをナーン側に直接的に知らしめる効果があったと考えられる。

そして、チェンルンの国主、すなわちシプソンパンナーの王は、ナーンの使節のプラ・インタラーチャーに対して、バンコクへの朝貢を断っている。その理由は、弟と母と妹がビルマに留められているので、バンコクに朝貢してそれがビルマ側に知れたら、人質となっている家族に危険が迫るためである。ここでは、ビルマとの関係を、朝貢できない理由としている。

更に、中国もこの事件に直接に関わってきた。

その後、チャオ・ムアンラー⁴⁸⁾（思茅の中国人長官）は、中国人においてこさせて、プラ・インタラーチャーに会わせた。中国人は、強制的にマハーチャイに連れて帰ってこさせた。そして、チェンルンの国主は、プラヤールワン・プロム Phrayaaluang Phrom と中国人においてこさせ、マハーチャイに二頭の馬、銀の皿、金の皿を用意させて、友好の印の品とした。それから、銀の板一枚と金の板一枚、計三通⁴⁹⁾の手紙と、紙の手紙一通を書かせた。ナイ・テーパウォン Naay Theephawong とプラヤールワン・プラサート Phrayaaluang Phrasaat（宮内大臣）⁵⁰⁾とプラヤールワン・チャイナーム Phrayaaluang Chaynaam に、プラ・インタラーチャーを連れてムアン・ナーンにおいてこさせた。
[Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 13-14]

ムアンラーは思茅（地図参照）のことであり、チャオ・ムアンラーとは、思茅の支配者を意味することばである。これは思茅の中国側の長官を指すと考えられる。明記はされていないが、中国人が「マハーチャイに連れて帰ってこさせた」対象はプラ・インタラーチャーであり、「連れて帰ってこさせた」先はムアンポンかムアンルワン・プーカーと考えられる。

思茅から派遣された中国人の使節は、ナーンの使節代表であるプラ・インタラーチャーに会い、

その結果、ナーンの使節を強制的に帰らせた。しかし、その後、シプソンパンナー側からの取り繕いがある。

シプソンパンナーの王は、マハーチャイに友好の品を用意させた。また、ナーンに渡すための銀・金表文および紙の手紙を書かせた。そして、シプソンパンナーの宮内大臣らに、プラ・インタラーチャーを、わざわざナーンまで送らせているのである。おそらく、贈り物と銀・金表文、紙の手紙も、宮内大臣らが持つていってナーン側に渡したものと思われる。

この、1844年の一連の出来事⁵¹⁾を見ると、1843年の時と同じく、ナーン側からシプソンパンナー側に要求がなされている。今回は、人の引き渡しに加えて、バンコクへの朝貢の要求もなされた。シプソンパンナー側は、この時もナーンからの要求を断ったのであるが、その理由、特にこの時バンコクに朝貢できない理由としては、中国・ビルマとの関係を強調している⁵²⁾。だが、その後、シプソンパンナー側は、贈り物と手紙を用意し、ナーンにまで使節を派遣するなど、やはり前回と同じく、ナーン側、バンコク側に対する配慮を怠っていない。

7 1848年のバンコク側の接近

シプソンパンナーとナーンとの三度目の接触は、「証言」中には、1848年8月のこととして書かれている。

申年、成就年（1848年）8月、ムアンポンのプラヤールワン・チャーン Phrayaaluang Chaang（象担当大臣）が、ムアン・ナーンのターオ・クワンケオ Thaaw Khuankew とターオ・アーサームアン Thaaw Aasaamuang を連れて、雄象・雌象六頭を用意して、のぼっていってムアンラムでマハーチャイと会った。マハーチャイは象六頭を買っておいた。それから、馬一頭とビルマ式の絹一枚と金箔を貼った傘一本を用意して、来てプラヤー・ラー

チャップット Phrayaa Raachabut に贈った [Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 18]。

まず1848年という年号であるが、これは1847年の間違いの可能性がある。なぜなら、この記述の後ろに「その後 yuu maa」として年号なしで、マハーチャイ・ガーダムおよびノーカム側と、王およびマハーチャイ側との戦争の話があり、その戦争の続きの話がまた「その後 yuu maa」に続けて1848年1月のこととして書かれているからである。

さて、この時マハーチャイは、自身の治めるムアンポンではなくムアンラムにいた⁵³⁾が、そこへムアンポンの象担当大臣がナーンの使者と見られる二人を連れていている。そして、マハーチャイは贈り物をプラヤー・ラーチャブット⁵⁴⁾に贈っている。「来て maa」とあるので、マハーチャイ自身が、ナーンに行ったのかもしれない。

さて、前述のように内戦の記述が続いたあと、次に1848年2月のこととして、今度はナーンではなく、ルワンプラバーンやチェンマイといったバンコク側の他の朝貢国からの接触について書かれている。

申年、成就年(1848年)2月、ルワンプラバーンの国主が、ターオクン thaaw khun (貴族、支配者層) を任命して手紙を持たせてのぼってこさせて説得し、家族を連れてムアン・ルワンプラバーンに入っこさせた。その後、三一四日して、ムアン・チェンマイのセントラン・ムアンクワーン Senluang Muang Kwaang が、双身散弾銃一丁と金で縁取りした急須一つを用意して、持ってのぼっていってムアンポンに与えた。プラヤー・チェンマイ (チェンマイの支配者) と友好的に話した。プラヤー・チェンマイは、ムアン・シプソンパンナーとムアン・チェントゥンはまだ友好的であるかどうかを尋ねさせた。マハーチャイは答えた。「ムアン・チェントゥンとムアン・シプソンパンナーは、普通ではない。なぜなら、マハーチャイ・ガーダムとナーライ・ノーカム

が誘いにいってムアン・チェントゥンのビルマ人やクーン人 (チェントゥンのタイ族) を連れて攻めてきたのに、マハー・カナーイ Mahaa Khanaan (チェントゥンの国主) は知っていても禁じないから。」セン・ムアンクワーンは言った。「ムアン・チェンマイの支配者たち caw naay は、軍を挙げてのぼってきてムアン・チェントゥンを攻撃しようとしている。ムアン・シプソンパンナーは、どう思うか。」マハーチャイは答えた。「ムアン・チェンマイが兵を挙げてムアン・チェントゥンを攻撃するのはいいことだ。マハーチャイは、兵を挙げてきて手伝おう。」申年 (1848年) の四月白分十五日に、軍を合流させると約束した。 [Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 20-21]

ルワンプラバーンに連れていかれた家族が誰の家族かということには具体的に言及されていないので、おそらく証言者であるマハーチャイの家族のことであろう。手紙の内容がどのようなものであり、どのように説得したのかはわからないが、マハーチャイは実質上、バンコク側に家族を人質にとられたことになる。

そのすぐ後にチェンマイからの使いもやってきて、チェンマイが計画しているチェントゥン攻撃についてマハーチャイに尋ねている。この証言中では、チェンマイ側は贈り物を携えて「友好的に」、そしてまずシプソンパンナーとチェントゥンとのその時の関係をきいてからチェントゥン攻撃に対してシプソンパンナーはどう思うか尋ねるといった、強制ではない聞き方をしたことになっている。だが、バンコク側に家族を人質にとられてしまったマハーチャイは、チェントゥン攻撃に協力せざるをえない立場に追い込まれていたのではないか⁵⁵⁾。

更にそのあと、王と副王とおそらくその家族・親族と考えられる人々が、マハーチャイを頼ってやってくる。

申年、成就年 (1848年) 2月に、チェンランの国

主と副国主（副王）⁵⁶⁾と十一家族あまりが、逃げてムアンポンのマハーチャイを訪ねてきて、こう言った。「マハーチャイ・ガーダムとナーアイ・ノーカムの軍が攻めてきて、ムアンヤーンに至った。チェンルンの国主と副国主（副王）は、支配者層の人々thaaw phrayaaと民phrayを徵發して出かけて戦おうとしたが、人を見つけることができなかった。」マハーチャイは、人を徵發してきて三千人あまりを用意し、そしてプラヤー・カムムーン Phrayaa Khammuunと民phray二百人に、ムアンポンから二晩かかるところにあるダーン・キウロムdaan⁵⁷⁾ kiwlomを守りに行かせた。
[Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 21]

マハーチャイは、マハーチャイを頼って落ち延びてきた、王・副王とその家族・親族を、ムアンポンで保護する。証言中には書かれていないが、その後、バンコクに至る王・副王の母や、ルワンプラバーンやナーンなどバンコク側の朝貢国に連れて行かれた王・副王の家族は、この時にムアンポンに来たものと考えられる。そして、マハーチャイは、兵を集めることなく、チェンルン側に代わって兵を集め、守りを固めさせたのである。

その後、またナーンあるいはその他のバンコク側の軍隊が、直接ムアンポンの付近まで入ってくる。

2月白分に、プラヤー・ラーチャブットとプラヤー・コンカークアンペット Phrayaa khongkhaakhanphetが兵を挙げて入ってきて、ムアンマーン Muang Maangに駐留した。ムアンマーンの支配者は、支配者層の人thaaw phrayaaをしてマハーチャイに言いにこさせた。マハーチャイは、ターオプラヤールワン・バンコム Thaawphrayaaluang Bangkhomを任命して、おりてこさせて話し尋ねさせ、プラヤー・ラーチャブットと軍の指揮官たちを招いてムアンポンに入らせた。プラヤー・ラーチャブットはプラヤー・コンカークアンペットとプラヤー・ペットチャダットコン Phrayaa Phetcadatkon、プラヤー・チャイソ

ンクラーム Phrayaa Chaysongkhraam、指揮官たちに入って行かせて、友好的に話させた。
[Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 21]

ムアンマーンはムアンポンの南に近接する国である（地図参照）⁵⁸⁾。ムアンマーンからバンコク側の軍隊が来た⁵⁹⁾という知らせを受けたマハーチャイは、まず使いをおそらくムアンマーンに派遣して尋ねさせ、それから軍の指揮官たちをムアンポンに招いたと言っている。バンコク側の指揮官たちは、それに応じる形でムアンポンに行っている。これによって、マハーチャイはもちろん、落ち延びてきてマハーチャイに頼っていた王・副王とその家族・親族たちも、バンコク側に全面的に協力せざるを得なくなったと言える。

マハーチャイの証言はここまでであり、この後どのようなことがあったかは書いていないが、同じ1848年に、マハーチャイ、王・副王の母、そして副王はバンコクに至っている⁶⁰⁾。その経緯が証言されていない理由は、それがバンコク側にとつては周知のもので、マハーチャイにそれについての証言を求めるまでなかったからだと考えられる。

8 マハーチャイの証言に見る、シプソンパンナーとバンコク側との関係

以上の5から7までの内容から、シプソンパンナーとバンコク側との関係について、まとめてみよう。

まず、これらの接触のほとんどがバンコク側からの働きかけに始まっていることが指摘できる。そして、その働きかけはだんだんと積極性を増しており、シプソンパンナー側もだんだんと深くバンコク側と関わらざるをえなくなっている。

1843年の段階では、ナーンから人の引き渡しの要求を断って、贈り物をすることのみによって事を収めている。だが、1844年の段階では、人の

引き渡しに加えてバンコクへの朝貢も要求されており、また、ナーンの使節団を王に会わせざるを得なくなっている。最終的にナーンからの要求は断るもの、ビルマや中国を理由とし、また中国の力を直接に借りることによって、やっとのことであっても断ったと言える。1848年になると、ナーンばかりでなく、ルワンプラバーンやチェンマイといった、他のバンコク側朝貢国からの働きかけもあり、家族を人質として差し出したマハーチャイは、バンコク側に軍事的に協力せざるを得なくなっていくのである。時を同じくして、シプソンパンナーの王も、王位を奪おうとしている敵軍に対抗しえずマハーチャイのところに身を寄せたので、そのままバンコク側とつながっていくことになる。

このようなマハーチャイの証言にあらわれる過程は、前述の「シプソンパンナー側からバンコク側に頼り、援助を求めた」というタイ側の研究者による見方では説明できない。むしろ、バンコク側からの働きかけによって、シプソンパンナー側がバンコク側との接触を深めざるを得なくなつたと見るのが自然である。

バンコク側がシプソンパンナーに関与した原因としては、ラタナポンとヤンヨンが言うように、シプソンパンナー内の権力争いが外部からの力を引き込んだという面もあるかもしれない。しかし、もしそう言えるとしたら、それはバンコク側がシプソンパンナー内の混乱に乗じて接近したことであり、シプソンパンナー側からバンコクやバンコクの朝貢国の援軍を頼ったということではない。バンコク側の軍がシプソンパンナーに至る前の、ナーンとムアンポンの関係も、友好関係というよりはむしろ、ナーンがムアンポンに人の引き渡しやバンコクへの朝貢などを迫っていた関係と見るのが自然であろう⁶¹⁾。

9 結論と今後の課題

以上、見てきたように、シプソンパンナーの副

王とマハーチャイおよびその家族たちがバンコクやバンコク側の朝貢国へ至った原因是、シプソンパンナー側からバンコク側に頼り援助を求めたからではなかったことが明らかになった。

では、チェンルンの王統年代記中の「副王とマハーチャイは強制的に、あるいは騙されてバンコクに連れていかれた」という記述については、どう考えたらよいであろうか。シプソンパンナー側から自発的にバンコク側に頼ったのでなかつたら、その後強制的に、あるいは騙されてバンコクに連れていかれたということも起こりえたかもしれない。しかし、それについてこれ以上の議論をするためには、1948年以後の経過について、バンコク側の同時代の一次史料などを検討することが別に必要になってくる。

次に、この時代のシプソンパンナーが、中国、ビルマといった外部の大権力とどのような関係にあったかについて考えてみる。

19世紀半ばは、中国やビルマには、イギリスを初めとする西欧列強勢力の介入があり、ナッチャーの言うように、ビルマも中国もそれぞれの内部問題を抱えていた [Natcha 1998: 87]。だが、本稿で分析の対象とした1840年代に、ビルマや中国のシプソンパンナーへの影響力が減少していたかというと、そうではないようである。

本稿で考察したように、1844年にナーンからなされたバンコクへの朝貢の要求は、ビルマ側に人質を取られているという理由でシプソンパンナー側に断わられ、そして最後には中国側がナーンの使節を強制的に帰らせている。当時は、中国・ビルマのシプソンパンナーに対する影響力は強く、シプソンパンナーはその二者の間でうまくバランスをとって立ち回らねばならなかった⁶²⁾。そこにバンコクまで関わってくるのは、シプソンパンナー側としては避けたかったと考えた方が自然である⁶³⁾。

最後に、今後の課題について記したい。

本稿では、ナーンを初めとする北部のバンコク側朝貢国からの働きかけによって、シプソンパンナーがバンコク側と結び付けられていったことを明らかにしたが、バンコク側、あるいはバンコク側朝貢国が何を目的としてそれをおこなったかについて考察できなかった。もし、関連の同時代一次史料がバンコク側に残っているならば、この問題について更に考察を深めることができる可能性がある。また、これについては、チェントゥン攻撃がどのように位置づけられるかという問題と絡めて検討することが必要である。特に、ナーンやチェンマイがどのような意図を持っていたのかということは、バンコクとは切り離して考えてみなければならぬだろう⁶⁰⁾。

〔注〕

- 1) シプソンパンナー地域を含め、東南アジア大陸部北部一帯に分布するタイ族のタイは、無気音 (Tai) で表される。それに対してタイ国のタイは有気音 (Thai) である。ただし、東南アジア大陸部北部一帯のタイ Tai 語と現在のタイ国中部で用いられるタイ Thai 語（タイ国語のもととなっている）とは、同じ南西タイ Southwestern Tai 諸語のグループに属している。
 - 2) 1950年代まで存在しており、その広がりはほぼ現在の中華人民共和国雲南省西双版納傣族自治州に重なっている。
 - 3) タイ国語ではムアン muang、シプソンパンナーのタイ tai 語ではムン moeng という発音に近くなる。本稿では、タイ語の固有名詞・地名・その他の用語を使う時、混乱を防ぐために、可能なところは原則としてタイ国語の発音に統一して示す。
 - 4) シプソンパンナーのタイ語では、ツェンフン Cheng Hung という発音に近くなる。
 - 5) チャオムアン Caw Muang というタイ語に、本稿では「國主」という訛語をあてておく。チャオは「主」という意味である。なお、シプソンパンナーのタイ語では、ツァオムン Tsaw Moeng という発音に近くなる。
 - 6) タイ語でチャオペンディン Caw Phendin あるいはチャオ・センウィーファー Caw Senwiifaa と呼
- ばれる存在であり、本稿では「王」という言葉で表す。また、ウッパラーチャー Uppharaachaa は、原則として「副王」という言葉で表す。
- 7) スチャーワンナ・ラーチャブット Suchaawanna Raachabut とも呼ばれる。ラーチャブットは「王子」を意味する言葉である。中国語名は、刀正綜あるいは刀正宗である。
 - 8) シプソンパンナーのタイ語では、ムンブン Moeng Phung という発音に近くなる。
 - 9) チェントゥンは、シプソンパンナーからチェンマイに至るルート上にあり、シプソンパンナー側の最も辺境にあるターロー Thaa Loo からは、約60キロメートルのところにある。
 - 10) 『史料集成』については本文3参照。その第九部序文は、ダムロン親王により書かれたもので、1918年4月2日の日付がある。ここで言及したのは、本稿で検討の対象とする「ムアン・チェンルンのポンサーワーダーン」（本文3参照）に対してつけられたコメントである。
 - 11) 現在のタイ国北部にあたる地域を指している。このころ、この地域にあった諸国は、バンコクの朝貢国となっていた。
 - 12) Chuakhrua Caw Phendin あるいは Choekhoe Caw Senwiifaa と呼ばれるものである。シプソンパンナーのタイ語によってタム文字で書かれた写本の形で存在していたもので、多くの異本がある。
 - 13) 例えば、江応樑は、『泐史』（注14参照）の関係部分を引いて、中国側の史料にはそれについては記述がないとだけ言っている [江 1983 : 396]。朱徳普は王統年代記の異本をつきあわせて校訂作業を行い、刀正宗の治世のこととして、ノーカムがシャムの兵と結んでシプソンパンナーのムアンポンに侵入し、マハーチャイと王・副王の母は捕らえられてバンコクに連れていかれ、ムアンウーに助けにいった副王もシャムに拘留されたと書いている [朱 1987 : 191] が、それに対する評価は示されていない [朱 1987 : 191, 1993 : 283]。陳序經は著書の中でこの事件についての『泐史』の記述をひいているが、彼もそれに對して何も付言してはいない [陳 1993 : 143-145]。一方、刀永明は、その事件について書かれている王統年代記の『泐史』と『車里宣慰世系簡史』を参照しているはず [刀 1989 : 1-3] なのに、この事件についてまったく触れていない [刀 1989 : 180-184]。一般的的傾向として、中国ではこのような史料の「校訂」は多くなされるが、歴史学上の問題としての考

- 察が加えられることは少ない。また、現代の国際関係との関わりで、この事件を評価することが避けられている可能性もある。
- 14) 李沛一によって中華人民共和国成立前に訳出。出版されたものであり、1998年に『雲南史料叢刊』の第五巻に再録されている。
- 15) シブソンパンナーが西双版納傣族自治州として中華人民共和国の一部になって以降、1963年に州の政治協商会議が整理したものを基礎としている。1983年末になって、その整理の継続が決定されたあと、タイ語で書かれたさまざまな年代記異本や聞き取り調査の結果を踏まえ、漢文史料による考証を経て、1986年に初稿が完成したものである。1987年には先に中国語版が、1990年にはタイ語版が出版されている。[中国人民政治協商會議西双版納傣族自治州委員会文史資料工作委員会 1987:1] タイ語版の本文は、手書きのタイ文字(タム文字)で書かれている。
- 16) 現在確認できるもので、この事件について触れているチェンルン側の王統年代記は、四点のみである。その他の王統年代記の異本では、副王とマハーチャイがバンコクに至ったことについては触れられていない。本文で触れたもの以外については、次のようにある。
- 中国語訳された、「西双版納傣族歴史片断」には、副王がバンコクに行っていてもどってきたという事実は書かれているが、それ以上の説明はない [刀国棟、呉宇濤訳 1988]。『続泐史』には、副王とその母はまずムアンマーに逃げており、ナーンの國主がマハーチャイを助けに来た後に、副王と母そしてマハーチャイをルワンプラバーンに伴っていき、ビルマ王がそれを知った後、副王母子を迎えてバンコクに連れていったとしている [叭竜雅那翁: 117]。
- 『続泐史』は1844年から1950年までの出来事が書かれている。著者はこれを書いた当時57歳だったので、19世紀半ばのこの事件については当然何かを参照して書いたものと考えられるが、それが何であったかはわからない。また、支配者層の一人だったことがその名前から推測できるが、それ以上についてはわからないので、どのような立場からこの事件に対する評価が下されたものかも不明である。
- 17) 本稿で挙げた、タイ国の研究者の研究ではタイ Thai という表現が使われているが、本稿では、基本的に「バンコク側」や「バンコク勢力」という言葉を使って表す。
- 18) この史料については石井米雄の詳細な説明がある

- [石井 1999a; 1964]。また、この史料の英訳 [cāwphraja thipphaakorawon] (Flood trans.) 1965–1973] 第三巻には、Introductory Remarks として著者についての解説がある。
- 19) どのような性格の史料を参照し、その内容をどのように組み合わせて意味づけたのかということも、もちろん明示されてはいない。
- 20) この時の状況は、ナーンの支配者たちが権力を打ちたてようとしたことと繋がりがあるとも言っている [Yangyong, Rattanaaphon 2001: 86, 133]。
- 21) それが言えるとしたら、次の段階で初めて、王やマハーチャイラがビルマや中国に頼る代わりにバンコク側に頼ったといえるかどうか、の検討が必要になるだろう。
- 22) 国立図書館の史料「四世王期史料小曆1220年38番 チャオプラヤー・ニコンボディンの手紙の草稿 cotmaaiheet ratchakaan thi 4 c. s. 1220 leek thi 38 ruang raang cotmaai cawphrayaan nikənbodin」を用いている。それは「ムアン・チェンルンのポンサーワダーン」(本文3参照)の後半に収められていた「チャオプラヤー・ニコンボディンからマハーチャイへの獅子印文書の写し」の、草稿段階のものと考えられる。獅子印文書とは、民部大臣等から地方国・朝貢国へ出された手紙である [川口 2005]。この場合は、ムアンポンあるいはシブソンパンナーは朝貢国に準じるものと見なされたのであろう。ナッチャーが引用している部分については、二つの史料の対照を行った。字句の多少の違いはあるものの、大筋としては同じであった。
- 23) 更にこの史料は、1858年の段階でバンコク側からマハーチャイに対して出された手紙である。その時点では、チエントゥン攻撃も終わりシブソンパンナーからバンコク側に来ていた人々がすべて帰ってしまって、シブソンパンナーとの連絡は途絶えていた。その手紙の意図は、「マハーチャイを援助し必要ならば保護するので、詳しい情勢を知らせて欲しい」とするものである [Phongsawadaan Muang Chiangrung 1964: 30-31]。そのような文脈では、バンコクの王は恩情を持ってシブソンパンナーに深い配慮をしていたという書かれ方がされるのは当然である。この史料だけからは、実際の事件が起る中で四世王がそのように考えたとは言えない。それは、手紙が書かれた1858年の時点でのあと付けであり、しかもそれは四世王の考え方そのものでもなく担当の大臣あるいは官僚が文脈に合わせて書

- いた可能性も大きい。
- 24) 望月直人氏からは、雲南ではちょうどこの時期に回族を中心とする清朝に対する蜂起があり清朝の雲南に対する影響力が非常に弱まっていたということ、よってシブソンパンナー側がバンコク勢力に頼る動きを見せる可能性も十分にありうるとのご指摘をいただいた。この点については、今後の課題として検討していきたい。
- 25) 筆者が参照した『史料集成』は、Ongkaankhaa khong khurusaphaa 版である。
- 26) この証言の内容は次のような構成となっている。
- ①1ページ：「1852年、ムアンポンのマハーチャイに訊ねて、以下のような情報を得た。」という導入部分
 - ②1～5ページ：マハーチャイの祖父から始まる、ムアンポンの支配者一族の親族関係
 - ③5～6ページ：モム・スワンナ（刀士宛）から始まる、チェンルンの支配者一族の親族関係
 - ④6～21ページ：シブソンパンナーの王、マハーワン（刀太康）が死んでその息子のチャオ・スチャーワンナ（刀正継（宗））が即位して以来、1848年までに起こった出来事の、年代順の叙述
 - ⑤21ページ：「マハーチャイの証言はここまでである」という締めくくりの部分
 - ⑥21～22ページ：マハーチャイが貢納したということ、貢納品の種類と数量、それに対して返礼があったこと
 - ⑦23～24ページ：シブソンパンナーからバンコク側に来ている、ムアンポン、ムアンマーン、ムアンユワン、チェンルンの人々の1849年の段階での記録。支配者層の人々は名前、その他の人々は人数が記録されている。
- この史料が収められている叢書全体のタイトルも「ポンサーワダーン集成」Prachum Phongsawadaan であり、チェンルンに関しても、それに合わせてポンサーワダーンの名がつづかれているものと見ることができる。その内容としてこの調書が採録されたのは、調書中で支配者一族の家系について書かれていたり事件が起こった年代順に記されておりしたため、形式面で一般に「ポンサーワダーン」と言われるものに似通っていると見なされたからであろう。
- 27) 石井は、「本書は1852年、現ビルマ領シャン州のKengtung (Chiang Tung) にタイが制討の軍を進めた際作成した、Mahachai のチェンルンに関する証言録である。」との解題をおこなっている [石井 1999b : 294]。
- なお本来なら、その元となっている一次史料がタイ国の国立図書館などに保存されていないかどうかを確かめ、それを見ることができればそちらを使うべきであるが、現段階ではその作業をするには至っていない。
- 28) カムハイカーンでは本来一人称が使われる [川口 2005 : 27] が、それがすべて「マハーチャイ」に変えられているのは、『史料集成』に収録される際になされた変更であろう。また、この証言の中では、シブソンパンナーの王は「チェンルンのチャオムアン（国主）」と呼ばれている。これも、マハーチャイ自身の言葉遣いであるとは考えにくい。なお一方で、この後に付されている、1858年のバンコク側よりマハーチャイへの手紙の写しでは、バンコク側はシブソンパンナーの王のことをチャオ・センウィーファーと呼んでいる。
- 括弧書きで小曆と仏暦の年号が付してある部分は、『史料集成』に収録される際に付されたものであると考えられる。
- 29) その他、戦争時の兵の人数、贈り物の詳細と数量、人の年齢など、記載されている情報は具体的で詳細にわたっている。その詳細さは、すべて正確に記憶していたとは考えられないほどであるので、マハーチャイは書かれた記録を持っていた可能性が大きいだろう。
- 30) 筆者が参照できたのは、「ムアン・チェンルンのボンサーワダーン」と同じ『史料集成』の中の第十部に収められているもの [Phongsawadaan Muang Naan 1964] と、「人民版年代記集成」Prachum Phongsawadaan cabap Raatsadon のシリーズとして出された『プラクート寺版ナーンの歴史』Phuun Muang Naan cabap Wat Phrakoet [Nidhi Aeusrivongse ed. 1996]、そして英訳版の The Nan Chronicle [Wyatt trans. & ed. 1994] である。
- 『史料集成』に収められているものは、ナーンの国主であった、プラチャオ・スリヤポンパリッタデート Phracaw Suriyaphong Pharittadeet が書かせたものをもとにしている。バンコクで葬式本として出された段階で、バンコク側によって言葉遣いなどが多少改変せられている。
- プラチャオ・スリヤポンパリッタデートが死去した時のナーンの副国主 Uppharaachaa が、その葬

式本を出すために書いた伝によると、プラチャオ・スリヤポンパリッタデートはバンコクの王によって1893年に任命されてから1918年に亡くなるまでの25年間、ナーン国主の地位にあった。彼は、1850年代のチェントゥン攻撃の際にもバンコク軍のために働いている。また、チェンルンの支配者の一人であるプラヤールワン・パンコム Phrayaaluang Bangkhom をバンコクに連れていて王に拝謁させたり、ムアンポンからナーンに来ていた人々をムアン・チェンムアン Chiang Muan とムアン・チェンカム Chiang Kham に移住・定着させたりしたとも書かれている [Phongsawadaan Muang Naan (Prachum Phongsawadaan lem 9) 1964: 160-162]。プラチャオ・スリヤポンパリッタデートは同時代の人物ではあるが、本稿で主として考察の対象とする1840年代にはまだ10代の若さである。

- 31) プラヤー・チェンケン Phrayaa Chiang Khen をここでは、チェンケンの国主と訳した。
- 32) プラヤー・プーカー Phrayaa Phuukhaa をここでは、プーカーの国主と訳した。
- 33) ウッバラーチャー Uppharaachaa は、チャオムアンに国主という訳語をあてるのに対応させて、ここでは副国主と訳した。
- 34) 都は、メコン河東岸のチェンケンからメコン河西岸のムアンユーへ、更にムアンシンへと移動した。
- 35) ムアンルワンとムアンプーカーと、二つの中心があったという説もある。
- 36) メコン河沿いにあり、現在はタイ国チェンラーイ県に属している。メコン河を渡った対岸のラオス側には、ホワイ・サーイがある。
- 37) 史料のこの部分では、プーカー・ムアンルワンとあらわされている [Phongsawadaan Muang Naan (Prachum Phongsawadaan lem 10) 1964 : 51]。
- 38) () 内は筆者による補足である。以下の史料の引用についても、同様である。
- 39) この史料では、国名にすべてムアン Muang という語が付されている。しかし、ムアンという語をつけず、そのあと部分のみを通例の国名として用いるものも多い。本稿では、そのようなものは原則としてムアンを省いて示してある。
- 40) 北に行くことは「のぼる、あがる khun」、南へ行くことは「くだる、おりる long」という言葉で表されている。本稿では、そのまま訳出する。
- 41) 原文では、thaang maytrii という言葉を使って

いる。

- 42) 「いく pay」「くる maa」といった動詞は、バンコク側、ナーン側に視点を置いたものとなっているが、そのまま訳出する。以下の史料の引用でも同様である。
- 43) ターオ・クリッサナーとプラヤー・モンコンの家族という書き方がされているが多数の人民も一緒にシブソンパンナーに逃れた可能性もある、そして、それらの人々はシブソンパンナーにとって人的資源として有用であったので返したくはなかったという可能性があるというコメントを、川口洋史氏からいただいた。筆者もそのような可能性は十分にあると考えるが、その証拠となる史料は今のところ見つけることができていない。
- 44) 白象などに準じて、吉祥のしるしとして贈ったと考えられる。
- 45) シブソンパンナー側からの人質としてナーンに留められていると考えられる。
- 46) チェンルンからメコン河を渡って北東へ20キロメートルほど離れた、中国の内地とのルート上にある。現在のミャンマーのシャン州にもムアンヤーンという場所はあるが、そちらではない。中国側のものはムアンヤーン・ノイ noy (小ムアンヤーン) とも呼ばれ、ミャンマーのムアンヤーンと区別される。
- 47) この時マハーワンはもう死んでおり、その息子のスチャーワンナがチェンルンの国主、すなわちシブソンパンナーの王であった。あの記述を見ると、このチェンルンの国主はプラ・インターチャーに「母、妹はムアン・アンワに留まっている」と言っている。この時スチャーワンナの弟のアラムマーウタと母と妹一人がビルマに留められていたので、ここでいうチェンルンの国主はスチャーワンナであることに間違いはない。
- 48) ムアンポンの隣国のムアンラーとは、声調が異なる。
- 49) 計二通の間違い、あるいは、後述の紙の手紙も含めて三通と数えたものと考えられる。
- 50) プラサート Phrasaat (シブソンパンナーのタイ語ではパサート Phasaat) は宮殿という意味であり、プラヤールワン Phrayaaluang (パヤーロン Phayaalang) は最上位の官位である。プラヤールワン・プラサート Phrayaaluang Phrasaat (パヤーロン・パサート Phayaalang Phasaat) を、本稿では宮内大臣と訳出した。
- 51) この年の出来事に関する記述は、1844年のナーン

- からチェンマイへの手紙 [Cotmaayheet Nakhon Chiang Mai: 119-121] の中にも出てくるが、その内容はマハーチャイの証言の内容とかなり異なっている。それに関しては、別稿で議論する予定である。
- 52) 「証言」のこの部分は、全体として、この時バンコクへの朝貢ができなかったのは中国やビルマとの関係にも原因があるという文脈で書かれている。それは、1852年にマハーチャイが証言をした際に、バンコク側にマハーチャイやシプソンパンナーの責任を追及されないために、特に強調されたとも考えられる。と同時に、シプソンパンナーやマハーチャイは、ナーン側、バンコク側に非協力的だったわけではなかったということ、出向いたり贈り物をしたりしてシプソンパンナー側としてはナーン側に配慮をしていたということを、バンコク側に証言していると見ることができる。
- 53) ムアンラムは、マハーチャイの十八人の妻のうち五人の出身地である [Phongsawadan Muang Chiangrung: 2-4]。マハーチャイはムアンラムと特に関わりがあったのかもしれない。また、この事件の前に、マハーチャイは兵を挙げて、シプソンパンナーの王位継承を求めて攻めてきたマハーチャイ・ガーダム軍と戦って退け、王と副王の地位を回復している [Phongsawadan Muang Chiangrung: 18]。その後、まだチェンルン近くに留まっていた可能性もある。
- 54) ここでいうラーチャブットは、ナーンの支配者層の一人と見るのが自然である。当時の北部諸国で最有力国であったチェンマイの支配者の中では、ブライヤー（バヤー）・ラーチャブットという職名は四番めの地位にあった。チェンマイと同じ北部諸国の一つであるナーンにおいても、ラーチャブットという職があった可能性が大きいだろう。
- 55) また、1852年の証言の時点でチェントゥン攻撃を計画していたバンコク側に対して、シプソンパンナー側がチェントゥン攻撃に対して積極的であったという考え方をマハーチャイはせざるをえなかったとも考えられる。
- 56) シプソンパンナーの王のことを史料中では「チェンルンのチャオムアン（国主）」と書いているので、ここではウッパラーチャーも「副国主（副王）」とした。本稿の他の部分で「副王」と訳出しているのと同じものである。
- 57) ダーン daan とは、国境の通路または閑を指す語

である。マハーチャイ・ガーダムとノーカムの軍がそこを通ってくるかもしれない、ということなのだろう。

- 58) シプソンパンナーには、ムアンマーン Muang Maang（シプソンパンナーのタイ語ではムンマーン Moeng Maang という音により近い）という場所は、メコン河の東岸、西岸にそれぞれ一つずつある。ここでいうムアンマーンは、メコン河東岸のムアンポンの南にある方である。なお、20世紀半ばの段階では、ムアンマーンはムアンポンに付属するムアンであった。
- 59) バンコク側の軍隊のムアンマーンへの駐留は、前の部分にあった、「申年（1848年）の四月白分十五日に、軍を合流させる」との約束によってなされたものだった可能性もある。
- 60) 副王はルワンプラバーンに、マハーチャイはナーンにおり、1948年に、両方をバンコクに来させたと、ダムロン親王は書いている [Prachum Phongsaawadaan lem 9 (序文 2-3 ページ)]。
- 61) 1843年と1844年にナーンがムアンポンに接触した方法と時期については、ナーンはまずムアンルワン・ブーカーまで軍隊を派遣し、そこから使者を出してマハーチャイに来させている。軍事力で圧力をかけているが、もうすぐ雨季に入るという時期なので、そのまま大きな戦争をするつもりはないというナーン側のこころづもりも読み取れる。
- 62) 中国の宣慰使にも任命されているのでシプソンパンナーを離れられないという理由で、王が直接アンワに来るようというビルマからの要求に答えられなかったゆえに、副王とその母・妹がビルマに人質に取られた、とチェンルンの王統年代記には書かれている。
- 63) 更に、当時バンコク勢力はビルマと対抗関係にあったので、バンコク側とつながりを持った王はビルマ側からのシプソンパンナーの王としての認証を失う可能性が大きかった。
- 64) ヤンヨンとラタナボンは、ナーンがムアンポンと友好関係にあったことを言う [Yangyong, Rattanaaphon 2001: 86, 133] と同時に、外部からの人力を集めようとするなどナーン自身のもくろみもあって、シプソンパンナーと関わっていたと指摘している [Yangyong, Rattanaaphon 2001: 150-151]。

<史料>

- Cotmaayheet Nakhon Chiang Mai* (チェンマイ市公文書) (in Thai). 1999. Bangkok: Khanakammakaan Chamra Prawattisaat Thai, Samnak Leekhaathikaan Naayokratthamontree.
- Cawphrayaa Thippaakorrawong* ed. *Phraraacha Phongsawadaan Krung Rattanakoosin Ratcakaan thii 3 khong Cawphrayaa Thippaakorrawong Mahaakoosaathibodii* (チャオブラヤー・ティッパー・コラウォン・マハーコーサーティボディーのラタナコーシン朝三世王期年代記) (in Thai). 1995. Bangkok: Krom Sinlapaakon. (first print: 1934, Bangkok: Ongkaankhaa khong khurusaphaa)
- Cawphrayaa Thippaakorrawong* ed. *Phraraacha Phongsawadaan Krung Rattanakoosin Ratcakaan thii 4 Chabap Cawphrayaa Thippaakorrawong (Kham Bunnaak)* (チャオブラヤー・ティッパー・コラウォン・カム・ブンナーク) 版ラタナコーシン朝四世王期年代記 (in Thai). 2004. Nonthaburi: Samnakphim Tonchabap. (first print: 1934, Bangkok: Ongkaankhaa khong khurusaphaa)
- cawphraya thippaakorawon* (Chadin Flood trans.), *The Dynastic Chronicles, Bangkok Era, The Fourth Reign I - IV* (in English). 1965-1973. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies.
- Damrongraachaanuphaap, Kromphrayaa 1918. Kham nam phaak thii 9 (第九部序文). *Prachum Phongsawadaan lem 9 (Prachum Phongsawadaan phaak thii 9 le phaak thii 10 tonton)* (史料集成第九卷 (史料集成第九部および第十部前半) (in Thai). 1964. Bangkok: Ongkaankhaa khong khurusaphaa.
- Nidhi Aeusrivongse ed. 1996. *Phuun Muang Naan Chabap Wat Phrakoe* (プラクート寺版ナーンの歴史) (in Thai). Chiang Mai: Suriwong Book Center.
- Phongsawadaan Muang Chiangrung* (ムアン・チエンルンのポンサーワダーン (年代記)). *Prachum Phongsawadaan lem 9 (Prachum Phongsawadaan phaak thii 9 le phaak thii 10 tonton)* (史料集成第九卷 (史料集成第九部および第十部前半) (in Thai): 1-37. 1964. Bangkok: Ongkaankhaa khong khurusaphaa.
- Phongsawadaan Muang Naan* (ナーン年代記). *Prachum Phongsawadaan lem 9 (Prachum Phongsawadaan phaak thii 9 le phaak thii 10 tonton)* (史料集成第九卷 (史料集成第九部および第十部前半) (in Thai): 285-344; *Prachum Phongsawadaan lem 10 (Prachum Phongsawadaan phaak thii 10 tonton phaak thii 11-12)* (史料集成第十卷 (史料集成第十部後半および第十一~十二部)) (in Thai): 1-134. 1964. Bangkok: Ongkaankhaa khong khurusaphaa.
- Renu Wichaasin transliterate&translate (Thaw Khwaangseng (刀光強)、Aay Kham (岩罕) eds. 1989. *Chuakhrua Jawsenwii Sipsongpanna* (シプソンパンナー王統年代記) (in Thai). Chiang Mai: Silk-worm Books.
- Wyatt, David K. trans. & ed. 1994. *The Nan Chronicle*. Ithaca: Cornell University, Southeast Asia Program.
- 叭童雅那翁 (張公瑾訳) 1988. 「西双版納傣族近百年大事記——統泐史」雲南省編輯組『傣族社会歴史調査 (西双版納之九)』昆明 : 雲南民族出版社、117-130頁。
- 中国人民政府協商會議西双版納傣族自治州委員会文史資料工作委員会編 1987. 『版納文史資料選輯 1 車里宣慰世系簡史 (專輯)』景洪 : 中国人民政府協商會議西双版納傣族自治州委員会文史資料工作委員会。
- 刀国棟、吳宇濤訳 1988. 「西双版納傣族歴史片断」雲南省編輯組『傣族社会歴史調査 (西双版納之九)』昆明 : 雲南民族出版社、117-130頁。
- 李拂一編訳 1946. 『泐史』昆明 : 国立雲南大学西南文化研究室。
- 『泐史』、方国瑜主編 1998. 『雲南史料叢刊』第五卷 昆明 : 雲南大学出版社、564-603頁。
- 西双版納政協文史組編 1990 『車里宣慰世系簡史 (西双版納傣文)』(タイ語) 昆明 : 雲南民族出版社。

<その他の参考文献>

- Natcha Laohasirinadh 1998. *Sipsongpanna: Rat Jariit (Sipsongpanna: A Traditional State)* (in Thai).

- Bangkok : The Thailand Research Fund.
- Walker, Andrew 1999. *The Legend of Golden Boat: Regulation, Trade and Traders in the Borderlands of Laos, Thailand, China, and Burma*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Yangyong Jiranakhon, Rattanaaphon Seetthakun 2001. *Prawattisaat Sipsongpanna (History of Sipsongpanna)* (in Thai). Bangkok: Amarin Printing and Publishing House.
- 石井米雄 1964. 「タイ語文献について(3)—— Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin」『東南アジア研究』2(2)、67-80ページ。
- 1965. 「タイ語文献について(4)—— 諸地方の Phongsawadan」『東南アジア研究』2(4)、38-51ページ。
- 1999a. 「ポンサーワダーン（王朝年代記）についての一考察」石井米雄『タイ近世史研究序説』東京：岩波書店、166-185ページ。
- 1999b. 「諸地方のポンサーワダーン」石井米雄『タイ近世史研究序説』東京：岩波書店、282-301ページ。
- 加藤久美子 1998. 「シプソンパンナーの交易路」新谷忠彦編『黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』東京：慶友社、222-261ページ。
- 川口洋史 2005. 「バンコク朝前期における文書行政——民部省を事例として」2005年1月に名古屋大学大学院へ提出された修士論文。
- 刀永明 1989. 「車里宣慰世系集解」雲南省少数民族古籍整理出版規劃弁公室編『車里宣慰世系集解』昆明：雲南民族出版社。
- 江応樸 1983. 『傣族史』成都：四川民族出版社。
- 陳序経 1993. 『泐史漫筆——西双版納歴史叢書』北京：中山大学出版社。
- 朱徳普 1987. 「《泐史》校補」雲南省編輯組『傣族社会歴史調査（西双版納之十）』昆明：雲南民族出版社、127-229頁。
- 1993. 『泐史研究』昆明：雲南人民出版社。